

# 高校生の部

## 高校生の部 テーマ

自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会

### 私たちがすべきこと、 できること、やりたいこと

私たちには、先人から引き継いだ社会を、自分の子どもたちや後世の人々に、より良い形で伝えていく責任があります。引き継いだ社会を単にそのまま受け渡すのではなく、時代に合わせて改善したり、新しい技術や発想によって抜本的に見直したりしなければなりません。さらに、次世代のために新たな資産を創り出すとともに、発展を阻害するものには適切に対処することも求められるでしょう。自分たちの子ども世代がより良い社会で暮らせるよう、私たちはどのような社会を残し伝え、どのような社会を創っていくべきでしょうか。皆さんの知識や体験を基に、これからすべきこと、努力してできること、自分として特にやりたいことは何かを考え、論文としてまとめてください。

## 大賞 [高校生の部]

ヒートアイランド現象、電力不足などの解決策として「小水力発電」に注目し、自分の体験を通して具体的な提案につなげた点が評価されました。

NFJ学生小説コンテスト2012  
自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会  
私たちがすべきこと、できること、  
やりたいこと  
入賞作品



# エネルギー地産地消型 エコシティの創造を目指して

鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校 1年

木田 夕菜 きだ ゆうな

不透過の鏡窓で側面を覆われたオフィスビルの壁に反射した陽光が、四車線道路の中心を走る青々としたグリーンベルトを照らしている。それはあたかも、荒涼な砂漠の中に浮かぶオアシスのようだ。

人口60万の中核市である鹿児島市の中心部を南北に走る市電。市民の重要な公共交通機関となっているこの市電の軌道敷内に芝生を植える工事が始まったのは、平成19年。九州新幹線の着く鹿児島中央駅から、市の中心街を通過して鹿児島市役所近くの鹿児島駅までの2.8kmの市電の軌道敷に、芝生が植えられた。

市電の軌道敷緑化の目的の一つは「ヒー

トアイランド現象の緩和」だ。コンクリートやアスファルトに囲まれた都市部では、夜間でも気温が下がりにくく、山村部に比べて総じて気温が高くなる傾向がある。鹿児島市によると、軌道敷の緑化によって地表面の温度が17～18度も違うのだそうだ。本当に芝生を植えたぐらいでそんなにも違うものなのか。疑問に思った私は小学校5年生の夏、宿題の自由研究として、ホームセンターで購入した温度計をもって、市電が行き交う合間をぬって軌道敷内に入り、温度を測ったことがある。陽炎の立つアスファルトの道路から、サクサクとした感触の芝に降り立った時、私は、それまで感じていた足にまわりつく熱

気から解放された感じがした。実際に、その場にしゃがみ込み、次の電車が来ないか注意しながら測定した温度計の目盛りを見て驚いた。さっき測った緑化されていない軌道敷の地表面の温度が47度だったのに対して、芝生の上は35度しかないのだ。私はにわかには信じられず、次の電車が行きすぎるのを待って、再度測り直したが、やはり結果は変わらない。実に12度も温度差があるのだ。

それだけではない。私は通常の道路と市電との交差点に立ち、両方の道路を交互に見比べた。すると、通常の道路は、まるでモノクロ写真を見ているかのようであるのに対して、緑化されたグリーンベルトの一本道が走る道路は不思議と優しげで、心を和ませられるのだ。また、軌道敷の緑化は都市景観を高める効果に加えて、市電の往来に伴う騒音をも軽減させているという。

先日、県外から親戚が何年かぶりに訪ねてきた。その時、この緑の道を見て、目を細めてこう言った。

「この緑のラインがあるだけで、心が安まるね。この街が好きになりそうだよ。」

ヒートアイランド現象が起こる主な理由は、市街地のアスファルト化、コンクリート化が挙げられるが、このことはより大きな危険を都市にもたらしている。

平成5年8月6日、午後から降り出した集中豪雨はあっという間に市中心部を覆った。

死者48名を出す大惨事となったこの時の様子を父が話してくれた。

「確かに叩き付けるような雨が突然降り出してきて驚いたけれど、何より市内を流れ出した水の勢いのすごさに驚くばかりだったよ。」

市内を流れる甲突川の両側には、団地が多い。舗装化されたこれらの団地に降った雨水は一気に団地を駆け下りて、谷間の川へと流れ込んだ。この災害で歴史的建造物である五大石橋も流失してしまった。まだ生まれていなかった私もその時の様子を記録したビデオを何回か見たことがある。よく友達と買い物する街が水没している光景に衝撃を受けた。

この水害の原因の一つとして挙げられているのが、先に述べた都市のアスファルト化なのだ。通常ならば、地面に落ちた雨水は、そのまま地中に染み込み、その後ゆっくりと川へと流れ出す。しかし、行き場を失った都市部の雨水は、瞬く間に固いアスファルトの上を走り、一つの大きな流れとなり、幹線道路すらも、濁流渦巻く川へと変えてしまう。

この水害を教訓にして、鹿児島市では、降った雨水を公園や学校等の公有地の地下の貯水池に溜めておき、少しずつ送水できるような仕組みが整備されていった。私の卒業した小学校も数年前に、校庭の地下に貯水池がつけられた。私は考えた。この一旦牙をむくとたいへん恐ろしいこの雨水をもっと有

効に利用できないか。あの石橋を押し流すほどの水量を役に立てることはできないのか。

2011年3月11日の震災後、日本では電力の確保が大きな問題となっている。再生可能な自然エネルギーをもっと活用すべきだという声も少なくない。水を利用した発電と言えば、水力発電である。ただ、水力発電自体はクリーンエネルギーではあるものの、発電にはダムが必要で、その為に自然保護の見地から反対意見が多い。また、山間地の自然を犠牲にして発電し、その電力のほとんどを都市部で消費しているという現実には、私はいつも疑問を感じていた。それは、原発をはじめとして他の発電所についても同様である。緑豊かな山間地や農村部の美しい自然を担保として、そして時には代償として、都市部の生活は成り立っている。私は思う。その都市が必要とするものは、できる限りその都市で賄うことができるような仕組みはできないのか。

近年、注目されているものに「小水力発電」がある。「小水力発電」とは、「出力1000kW以下の比較的小規模な発電設備」を指し、一般的な水力発電と比べて、ダムのような大規模建造物を必要としないのが特徴だ。本来、水力発電は、石油や石炭、ウランのような可採年数の限られる鉱物に頼らないために、永遠に再生可能なエネルギーである。また、原料を輸入に頼ることがない純国産エネルギーでもある。加えて、地球温暖化の原因の一つとされる二酸化炭素の排出

量が極端に少ないという利点がある。そこで私は考えた。既に開発された都市部の地下にある貯水池に、この「小水力発電」施設をつくることはできないのだろうか。都市部に降った雨をそのまま下水に流してしまうのではなく、小規模でも発電タービンを回す力として雨水を活用するのだ。一つ一つの発電施設は小さくても、都市部の地下にたくさんの発電施設ができ、それを集めれば大きな電力をつくり出せる。これならば、山間部の美しい自然を破壊することなく、同時に都市部の防災も行うことができる。そして発電に使った水は、道路に敷いたパイプを使って、夏場ならばヒートアイランド現象をおさえるための打ち水として、冬場ならば凍結した路面を解かすために散水する。

そしてその一方で、都市に林立するビルの屋上にはソーラーパネルを設置することを義務づける条例を制定する。勿論、その為に市は補助金制度等を設けて、その整備を補助、支援する。これならば、晴天時は太陽光発電、雨天時は小水力発電というように、発電主体を上手に切り換えながら電力不足を補い、環境に優しい発電を行うことができるのではないか。

次の時代を担う私たちが目指すべきは、この国が世界に誇れる自然豊かな日本の原風景を壊すことなく、人々が住む都市全体が青々とした緑に包まれ、自然エネルギーを生かして自分たちに必要な電力は自分たちで生

み出す「エネルギー地産地消型エコシティ」  
の創造なのではないだろうか。

私は思う。戦後、この国を支えてきたのは、  
私の祖父母や父母の世代による絶え間ない  
挑戦と研究による技術革新だった。だからこ  
そ、この国のもつその遺伝子を受け継ぎ、「環  
境」か「開発」かという二者択一の選択では  
なく、「環境」と「開発」の両方を実現する新  
しい都市づくり、国づくりのグランドデザイン  
を、私は未来という名のキャンバスに描いて  
いきたいのだ。

#### 参考文献

- ・ 環境省「小水力発電情報サイト」  
[http://www.env.go.jp/earth/ondanka/shg/  
page01.html](http://www.env.go.jp/earth/ondanka/shg/page01.html)
- ・ 国土交通省九州地方整備局「都市行政」  
[http://www.qsr.mlit.go.jp/n-park/city/index\\_  
e03\\_i.html](http://www.qsr.mlit.go.jp/n-park/city/index_e03_i.html)

## 優秀賞 [高校生の部]

街頭インタビューを行った行動力と、礼儀や高齢者の知恵を次世代に伝えるための世代間コミュニティというユニークなアイデアが評価されました。

NPI学生小論文コンテスト2012  
自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会  
私たちがすべきこと、できること、  
やりたいこと  
入賞作品

日本から  
未来を  
提案しよう



# 世代間交流による 学びコミュニティの構築

桜蔭高等学校 3年

岩間 優 いわま ゆう

## 1 はじめに

自分たちの子どもの時代には、いま叫ばれているグローバル化はよりいっそう進化していると想像する。日本は国際競争力を高めながら、独自の発展を実現し、さらなる自国の強みを創り出している社会に私たちはすべきである。他国にはまねできない日本ならではの文化や技術、そして価値観を力にして、これまでの先人が築いてきた歴史をつながながら、未来に向けて新しい日本の創造を考えていきたい。

そのときに要になるのは人の知恵や知識だ。その知力を備えた人材を育成すべく、地域

教育のあり方を提言する。

## 2 子育て世代が 次世代へ伝えたい 『日本の学び』

日本独自の学びは必ずしも専門性の高いエリートを育成する教育だけではなく、礼儀を大切にする心、共助共生の精神など社会性の高さが特性のひとつである。また丁寧で緻密な技術力の高い仕事ができる強みも備えている。次世代に伝えるべき学びは多岐にわたると想像する。そこで、私は幼児の子育て



中にある母親に『子どもに伝えたい日本の学び』についての街頭インタビュー調査を実施することにした。調査は区立幼稚園が近くにある江東区南砂町商店街でおこなった。

回答者は50名(約6歳未満の男女園児の保護者)。インタビュー内容は以下の通り。

- 子どもにいちばん伝えたい日本の学びは？  
(読み書き・計算、昔遊び、伝統行事、礼儀などジャンルを問わずに自由回答で)
- 教え、伝えるのはだれが望ましいか？

以上2項目の質問について回答いただいた。

子どもに伝えたい学びとして、読み書き・計算などの勉強面はほとんどの親が学ばせたいとは思っているが、いちばん伝えたいと思う選択肢として回答したのは4名、お手玉・けん玉・折り紙など日本独特の遊び文化が8名、正月や盆などの行事が10名、最も多かったのが25名の「礼儀」という回答だった。その理由を伺うと、「礼儀正しいことで、大人になったときに人間関係がスムーズになる」「あいさつがしっかりできるなど、人として基本的なことがきちんとできる子になってほしい」など家庭の教育方針が垣間見られた。また、その礼儀の教えを伝えるのはだれが望ましいかという質問の回答は両親が8名、祖父母が10名、地域の高齢者が5名で、礼儀を教え、伝えたいと回答した25名中でその担い手を両親よりも祖父母や地域の高齢者と回答している人のほうが多かった。「親として自分自身が礼儀を教える自信に欠ける」「別居

している祖父母には頼れず、地域の高齢者からも子どもに礼儀作法を伝えてほしい」という意見もあった。結果的に子育て世代も地域の高齢者の力を借りることを望んでいる回答が目立った。

このように親としても高齢者から学ぶ子育て支援を求めつつも、それが地域でシステム化されていないと実際には教えを受けることが難しい現状もあるのだと思う。教え伝える立場からも、そういった実践の場があればスムーズにできることも、昔のように地域でおせっかい年長者が機能していた時代とは違ってきているなか、現状では難しいようだ。

### 3 海外でも称賛される 日本の教えと学びを 世代間交流で再確認

私が昨年春に台湾を訪れたときのことだ。現地では、流ちょうな日本語で当時のことを熱く語るお年寄りに話を聞く機会を得た。台湾には日本統治時代に日本の中等教育以上を受けたトオサン(多桑)と呼ばれる人たちがいる。正直であること、勤勉であること、時間を厳守すること、親孝行すること。どれも日本統治時代に教わったことだという。そしてその考え方をいまもずっと心にとめているのだそうだ。台湾人には日本の精神に影響されたよい面とは反対に、日本に対して憎悪の思

いもあるのではないかと私は内心心配に思っていた。しかし、その後その不安が解消される話を聞くことができた。「残念な過去を忘れることはできないけれど、心を広くもって、憎むことや恨むことを忘れて相手を許し認めることも日本人から学んだ」と。さらに「苦労したからこそ豊かな人生になった」のだと聞いたとき、私はその不屈の精神に涙が溢れてきた。台湾の近代化に尽力したひとり、新渡戸稲造が提唱した「信」「義」「仁」などの武士道精神が深く台湾人の心に浸透していたことに、私はあらためて気がついた。

この体験を通して、私は地域社会のなかで、古き良き日本の学びを私たちの子ども世代にも伝えたいという思いをいっそう強くした。

## 4 世代を超えた 地域社会での 『学びコミュニティ 事業』の構築

これからの時代にこそ、衰退してきつつある昔ながらの地域での教育を見直し、日常のなかで習慣的に学んだことを次世代へと、そしてグローバルにつなげていく必要がある。それにもかかわらず、現状は少子高齢化が進み、家庭や地域社会で異世代が関わり合う機会が減少している傾向にある。地域や社会と関わるきっかけが得にくいために、孤立

した若い世代やさまざまな不安を抱える高齢者も増える一方だ。そこで世代間交流での学びの場を設けることで、子どもの社会性や情操性を育てるとともに、高齢者世代の生き甲斐、人間関係の充実や社会参加による健康維持を促進する。

幼老施設の複合化は単にハード面だけでは意味がない。ソフト面での事例を多様化していきながら、常に活性化し続ける『学びコミュニティ事業』であるべきだと考える。子どもや高齢者だけに限らず、地域の住民全体を巻き込んだ縦、横、斜めの関係でさまざまな人との関わりを持つことができるようなシステムだ。例えば地域に外国人が住んでいれば、受け入れて多様性のある学び場にしたい。ハンディキャップのある人がいれば共に交わることで思いやりの心を養い、互いに共感しあえる社会をめざすこともできるだろう。経験豊かな高齢者からは積み重ねてきた専門的なノウハウを学ぶこともできる。何より自分と異なる考え方に出会うことでコミュニケーション能力を向上させることができる。異論を受け入れながら合意していく過程を学ぶことで、異文化を持つ世界へ自国の文化を発信することもできるようになる。

新潟県上越市の保育園士雇用事業は、核家族の増加で子どもたちが祖父母世代と接する機会が極端に少なくなったことをきっかけに2000年に始められた。高齢者との世代間交流による園児の情操教育、中高年世代



の雇用機会創出、保育士の現場での負担軽減などの効果が実績として認められているという。上越市のように契約形態が市の嘱託職員（非常勤一般職）としての採用によって雇用を生み出すことでなくても、ボランティアとして登録し、保育の補助などに参加し活動する場合など、さまざまなやり方で、学びを支えるシステムを地域に備えることは有用であると私は考える。活動内容も多様化していることが望ましい。例えば年間行事や伝承遊び、草花・生き物の世話などの整備、簡単な施設の修繕など大工業務や清掃、散歩や遠足などで交流しながら、子どもたちはその経験を通して学んでいくことができるからだ。

性化に関するアンケート]

2012年8月実施、有効回答数1,820件

調査主体：日本経済新聞社デジタルビジネス局、調査実施機関：日経リサーチ

- ・新潟県上越市「保育園士雇用事業」の概要資料
- ・新渡戸稲造『武士道』岩波書店

## 5 まとめ

日本には受け継いできた独自の文化があり、それを次世代へとつないでいく使命を私たちは担っている。自治体や国、企業を巻き込みながら『学びコミュニティ事業』を後押しする策を全国各地で体系化することをめざしたい。

### 参考文献

- ・日経電子版読者に対するインターネット調査「地域活

## 優秀賞 [高校生の部]

祖父母が守ってきた里山を残したいという筆者の思いを、里山、自然環境の保護への力強い提言にまとめたことが共感を呼びました。

NFJ学生小説コンテスト2012  
自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会  
私たちがすべきこと、できること、  
やりたいこと  
入賞作品



# 次世代に残す「里山」

——コウノトリの舞う環境を守る農業の実践をめざして

神奈川県立中央農業高等学校 2年

谷口 淳人 たにぐち あつと

私の父母の実家は福井県にあります。谷口の家は代々続いた農家で、ご先祖様の住んだ家が越前市の味真野苑という公園の中に「旧谷口家住宅」と名づけられ、国指定重要文化財として保存されています。これは19世紀の越前平野によく見られた角屋（ついや）形式の民家のもっとも発達した住居だということです。この家には昭和50年頃まで親戚の人が実際に住んでいました。当時は田圃の広がる風景の中に茅葺の民家がよく似合っていたそうです。

同じ越前市内で私の祖父母も農業を続けてきましたが、平成22年の12月に交通事故

にあい、二人とも亡くなってしまいました。まだ私が高校に入学する前のことでした。そして今、祖父母が耕してきた田畑と山が残されています。私の父は神奈川県で高校の教員をしています。母と兄と私の4人家族は神奈川県で暮らしており、田舎の田畑は祖父母が守っていたのですが、突然の祖父母の死によって実家は住む人を失い、田畑もどうしたらよいものか、父母も困ってしまいました。しかし、田圃を荒らすわけにはいかないのので、地元で集団営農をする人たちにお願ひして、実家の田圃を耕作してもらっています。

祖父は長い間消防署に勤め、10年ほど前

## 次世代に残す「里山」

——コウノトリの舞う環境を守る農業の実践をめざして

に退職してからは、毎日のように山に入り下草を刈り、雑木を伐採したりして山の手入れを続けました。近所の人々が「谷口さんちの山が一番きれいだ」と言ってくれるほどでした。私たち兄弟が生まれた年には、それぞれ杉の苗木を300本ほど、記念に山に植林をしたそうです。生前に祖父母と山に登って見に行ったときには、直径15cmくらいに育っていました。また山の斜面にシイタケのほだ木をならべてあり、毎年おいしいシイタケができました。私が幼稚園の頃に山に行くとアケビの実がなっていて、祖父は高い木にはしごをかけてスルスルと登り、とってきてくれたことを覚えています。田圃では、一番山際の、山からの湧き水を引き入れる田圃でとれる米が一番おいしいと祖父はいつも言っていましたが、実は山からの水は水温が低く、苗の管理はすごくむずかしかったのです。それでも祖父は他の田圃より多い収穫量を上げていたそうです。

私たち兄弟が夏休みや春休みに田舎に帰ると、祖父は軽トラに私たちを乗せて、よく畑や山に連れて行ってくれました。スイカをとったり、カボチャをとったり、作業の手伝いをしてほめられました。小さい頃に稲刈りのコンバインに乗せてもらっている写真が今も手元にあります。私が農業に興味を持ったことには、この経験の影響があると思います。農業高校を受験することを決めて、その気持ちを話す前に祖父母が亡くなってしまったの

で、そのことを聞いたらどんなに喜んでくれたかなあと今も心に残っています。

私は現在農業高校の2年生。園芸科学科に在籍しています。日々の実習でトマトやキュウリを作ったり、バイオ技術で絶滅危惧種の植物を培養する研究をしたり、農薬や化学肥料の安全性について学んだりしています。私は将来「自然環境を守る農業」、つまり環境汚染のない農業の実践をしたいと考えています。今年の東日本大震災に伴う原発事故により、放射能汚染の問題が起きました。放射性物質による汚染は非常にまれな例ですが、食料の生産基盤である土壌や水が汚染されると、その生産物の安全性は損われます。この主な汚染源は化学肥料と農薬です。これからの農業では、いっそうの食の安全のために有機肥料を主として、農薬もより安全性の高い物を改良していくべきだと思います。

福井県内では現在、有機肥料を用いた特別栽培米が推奨されており、実家の田圃でも「エコハナ一番」という有機肥料を使っています。化学肥料をやめて有機肥料の使用が広まったため、ドジョウやオタマジャクシが田圃に増えたそうです。50年近く前にコウノトリが越前市に棲みついたことがあり、父も子供の頃に間近でコウノトリを見たそうです。それで越前市では以前から、コウノトリが息できる環境を再生しようという活動が行われているのですが、今年になって、実家の田圃の

## 次世代に残す「里山」

——コウノトリの舞う環境を守る農業の実践をめざして

あたりでもコウノトリの目撃情報がありました。これは確実に自然環境が改善されていることを意味します。

先日、日本の原風景として「里山」を取り上げるテレビ番組を見ました。それは岡山県にある棚田の風景でした。実家のある越前市は全体が盆地で、祖父の家は大虫町というところにあります。市の中心からだんだん標高が高くなり、一山越えると越前海岸へ続く位置にあります。いわゆる中山間地域と呼ばれる地形で、近くに大虫の滝という小さな滝があります。その流れが小川になって町内を流れています。田畑を取り囲んで山林があり、昔から人々が山の本々を生活に利用してきました。テレビで見る「里山」の風景はまさに私のふるさとの田圃や山の景色です。私は「里山」についてインターネットで調べてみました。日本の国土の約4割が「里山」といわれる地形です。昔から人々の生活の場として、人が手を加えてきた二次的な自然林ということができます。ここでは人間と動植物の「持続可能な共生生活」が成立していたのです。実家の田畑にはイノシシが出ますし、猿が出ることもあるそうです。父は以前、祖父と山に入ったとき大きなニホンカモシカを見たと言いました。福井県内ではシカというとカモシカのことなのですが、祖父は山で何度もシカと会っています。あるとき子牛ほどの大きなオスジカと出会い、にらみ合いになったそ

うです。どうして逃げないのかと思ったら、その後ろにメスのシカもいて、メスを安全に通らせる間、オスジカが前に出て頑張っていたそうです。

また、山の中では木の実や山菜がとれたり、カブトムシを捕まえたりもします。小学生の頃、実家の山でミョウガを摘んだり、ゼンマイをとったりしました。家族みんなで大きなカゴに何杯もとってきたミョウガをパックにつめて青果市場に出したこともあります。

「里山」はこのように人間と動植物が関わる貴重な自然環境です。代々、谷口のご先祖様が守ってきた杉やヒノキの山林は、祖父の代で新たに植林した部分があれば、樹齢が100年を超えるような樹木もあります。祖父が新たに植えた杉も約20年がたちました。祖父は一人で雑木林もよく手入れしてきた、伐採した木をシイタケのほだ木にしたり、薪として燃料にしたりしてきました。

雑木は伐採すると、翌年にはひこばえが出ます。普通、5年後くらいに「もやかき」という間引きをします。さらに10年後にもう一度「もやかき」をします。20年で元の大きさの林になり、また樹木として伐採して利用できます。温暖で湿潤な日本の気候では、木々の枝は少しくらい切ってもすぐに育ちます。「里山」はそれ自体がリサイクル可能な資源とっていいと思います。

祖父が亡くなって、これから父が定年に

## 次世代に残す「里山」

——コウノトリの舞う環境を守る農業の実践をめざして

なったら福井へ帰って、山の管理も何とかしたいと言っていますが、その次の20年は、私たちの世代の役割です。「里山」の環境を守り続ける社会こそ、これからの日本に必要なものではないでしょうか。私は高校を卒業したら農業大学へ進学して、さらに農業技術の勉強をしたいと考えています。福井に限らず日本中で、ドジョウやオタマジャクシが棲める田圃、コウノトリが舞い戻ってくる田圃の自然環境を、私たちの代で取り戻したいと思っています。

## 優秀賞 [高校生の部]

子どもたちが世の中への興味、関心を持てるように、子ども向け週刊誌を発行するという筆者の意欲が、審査委員の応援したい気持ち呼びました。

NPI学生小説コンテスト2012  
自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会  
私たちがすべきこと、できること、  
やりたいこと  
入賞作品



# 今どきの子供が未来を創る

## ——興味が繋ぐバトン

頌栄女子学院高等学校 2年

舂田 桃香 ますだ ももか

「今どきの若い子たちは」という言葉を年配の方が口にしてのをよく耳にする。しかしこれは、今若者たちに向けて言っている方々自身も言われてきた言葉に違いない。なんと平安時代から言われてきた言葉だからだ。あの有名な枕草子で清少納言は、『何事を言ひても、「その事させん」と「言はん」と「何とせん」と言ふ」と文字を失ひて、ただ「言はむざる」「里へ出でんずる」など言へば、やがていとわろし』とその時代の人々の言葉の乱れを嘆いているが、きっと清少納言自身も文学以外では言われたことのある言葉であろう。

ではいつの時代が正しかったのかと言えば、

正しい時代など定義できない。だが、遠い昔からずっと変わらず伝わり、自然と日本人に染みついている文化と教訓は正しいと言えるのではないだろうか。「今どきの若い子たちは」と言っている人が現代にもいるということは、きちんと時代が移り変わっている証拠ではないかと考える。平安時代を生きた人々が私たちの生きる現代社会の抱える問題を予想できなかったように、次世代の子供たちが生きていく世の中では、私たちが予想もできない新しい問題がたくさん発生するであろう。未知の世界に進むことは怖く、心配なことである。しかし歴史がどんどん積み重なり、その中で生まれる教訓によって私たちの生活は成



## 今どきの子供が未来を創る

——興味繋ぐバトン

り立ち、問題を解決してゆく。私たちもその教訓となれるように、古来より伝わってきたバトンを改良して受け渡さねばならない。

何かを伝えるためには、聞き手に興味を持ってもらわねばならない。聞く気がなければいくら私たちが何かを伝えたところで何も残らない。そして時代を創っていくという責任感や臨場感も次世代に生まれにくい。現代の社会ではテレビや新聞、雑誌、インターネットと、様々な媒体から情報が伝えられている。そして子供たちも含めて、現代の人々はこのようなメディアからの情報に触れる機会が多い。しかし今の若い世代は果たしてメディアからの情報を受け、今の世の中に興味を持っているだろうか。今日よく報道される「選挙に行かない若者が増加している」という事実からも、若い世代が世の中にあまり興味がないことは明白だ。テレビやインターネットを見ている、政治の動きや社会問題、国際問題に興味があって見ているわけではなく、単に娯楽要素として利用していることが多いからである。私たちが次世代の子供たちに残すべきことは、まさに「世の中のことをもっと聞きたい、知りたいと思う気持ち」である。そのためには小学生や中学生などのまだ頭の柔らかい頃から世の中に興味を持つ傾向を作らねばならない。

小さな子がおままごとでお母さんの真似を

するように、子供は大人やお兄ちゃん、お姉ちゃんの真似をして自分も大人になったような気分を味わいたいものである。私も小さい時はよくぬいぐるみで幼稚園の先生ごっこをしたり、大人のようにハイヒールを履きたくて母のハイヒールを履かせてもらったりしていたことを覚えている。これは幼少期だけでなく、小学生や中学生の女の子が化粧をしたがるように比較的大きくなってからも続くものではないだろうか。そこで私は、この子供の大人への憧れを上手く利用できないかと考えた。

私はジャーナリストになり、小、中学生向けの週刊誌を作りたいと考えている。ただの芸能情報や偏った考え方しか載っていない週刊誌ではない。子供が政治や世の中の動きに興味をそそられるような、分かりやすく読みやすい、遊びながら読める教育雑誌である。よく書店で、お母さんは雑誌を読んでいるが子供だけ飽きてつまらなそうにしている光景を目にする。そこでお母さんは子供に読ませたい本を選んできて隣で読ませるが、そう簡単に興味のない本を大人しく読んでいる筈がない。自分もお母さんと同じように雑誌が読みたいのに、大人向けのファッション雑誌や難しい漢字で書かれた週刊誌がずらりと並ぶ書店では読むものがなく、結局、子供向けの娯楽雑誌や絵本を読まざるを得ない。中学生ならば好んで中学生向けファッション雑誌を読んでしまおう。

## 今どきの子供が未来を創る

——興味繋ぐバトン

これは実にもったいないことだ。こんな問題が「子供向け週刊誌」によって解決されるのだ。子供は、「面白そう」と思ったものには何でも飛びつく。カラフルな色合いや、挿絵のあるものには興味をそそられる。子供向けのピールという名目のジュースが売れるように「大人向けの商品」が「子供向け」に改良されているものにはことさらに興味を持つのだ。そしてそれがその人にとって意味のあるものであり「もっと」と思うことができたならば継続する。まずは週刊誌を読む憧れで、子供の心をつかむのだ。

みなさんも「飛び出す絵本」をご存じだろう。富山県射水市の大島絵本館で手作り絵本のコンクールが昨年行われた。カラフルな絵本や飛び出す絵本など作りは様々だ。参加者の中に、小学生の頃仕掛けた絵本を読んで感動したことがきっかけで応募した方がいた。また取材した方は、「話の面白さや趣向を凝らした装丁を楽しんでいるうち、ついつい絵本館で長居してしまったことがある」とコメントしていた。このように、娯楽要素をたっぷり含んだ絵本には、大人まで心が奪われて引き込まれてしまい、また子供の頃受けた印象や記憶はずっと残るのだ。

この絵本が与える感動を週刊誌に取り入れれば、いとも簡単に子供の心をつかめるはずだ。子供向け新聞が現在普及している。私も小学生の時に読んでいたが、子供向けと

はいえやはり長い文章がずらりと並び、逆に興味を削がれてしまったことがある。そして結局、漫画だけを読んでやめてしまうということが多々あった。同様の理由で読むことを止めてしまった友人もたくさんいた。

そこで長い文章だけを並べるのではなく、漫画も取り入れたレイアウトにすることが大切だ。もちろん政治的内容の漫画である。よく歴史を学ぶための漫画の本があるが、まだ歴史を習ったこともない私の弟が、小学校低学年の時に、とても面白い挿絵の多い漫画の歴史図鑑に熱中し、小学校高学年で歴史を勉強していた私と話がぴたりと合うことがあった。

漫画で勉強なんて、と思う方もいるであろう。確かにその分野の細部までをすべて学ぶ事は不可能に近い。しかし実際、記憶として残すにはとても適している。語呂合わせで「いい国つくろう鎌倉幕府」と覚えることと同様に絵と関連付けて記憶の中に定着させるのだ。つまりエピソード記憶のうちの映像記憶である。これを利用して、現代の政治の流れを知ってもらうために政治家を題材とした漫画で表現すれば、楽しみながら、そして記憶に定着する方法で政治を学ぶことができる。

「社会に興味を持ってもらう」ことを目的としているので、まずは知ることの楽しさを伝えたい。それさえ分かれば、詳しく学ぶ意欲も

## 今どきの子供が未来を創る

——興味繋ぐバトン

湧き、「これでは駄目じゃないか」と日本の将来に不安を持ったり、「こうすればよいのに」と意見を持ったりする子供も出てきてくれるに違いない。この気持ちこそが未来を動かし、変えてゆくには必要であるから、私たちがすべきことは子供たちに「世の中のこともっと聞きたい、知りたいと思う気持ち」を持たせることなのである。この「子供向け雑誌」という、いかにも「今どきの若い子たちは」と言われそうな手段にぜひ乗ってみようではないか。子供たちの未来を創る意欲を育てる、「興味」が世代を繋ぐバトンとなるのだ。

### 参考文献

- ・ 清少納言（松尾聰・永井和子一校注・訳）『枕草子』  
新編日本古典文学全集 小学館
- ・ 「手作り“3D”絵本 飛び出す「三国志」 富山・射水」  
『中日新聞』（中日新聞社、2011年3月11日付夕刊）
- ・ 前野隆司『記憶 脳は「忘れる」ほど幸福になれる!』  
ビジネス社

## 特別審査委員賞 [高校生の部]

被災地を訪れ、多くの被災者の思いを聞く体験を通して震災以降の日本を正面から捉えたこと、また率直な意見が、審査委員の心に響きました。

NFJ 学生小説コンテスト2012  
自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会  
私たちがすべきこと、できること、  
やりたいこと  
入賞作品

日本から  
未来を  
提案しよう



## 自然と仲良く暮らすために —— 知ること、考えること、伝えること

三重県立四日市高等学校 2年

伊藤 茜 いとう あかね

従姉が結婚式を挙げた。私たちは家族で招かれ、初めて花巻市を訪れた。花巻は内陸にあり、大震災の傷痕も見当たらず、穏やかな景色が広がっていた。震災の一週間後、従姉は釜石で新しい生活を始めるはずだった。住むはずだったアパートも、勤めるはずだった薬局もすべて津波に呑み込まれた。地震直後、海沿いを車で走っていた彼とは三日間連絡がとれず、遠く離れた三重県で、従姉も私たちも、次々飛び込んでくる信じられない映像に呆然とするだけだった。あれから一年半、二人はアクシデントを乗り越え、この日を迎えた。

華やかな結婚式の翌日、私たちは花巻を

離れ、気仙沼から南三陸に向けて出発した。ここから気仙沼という標識を見て、テレビで見たあの風景がいつ目の前に現れるのかと緊張した。だが意外にも、かなり海に近づくまであんな悲劇が起こったとは思えないくらい静かな様子だった。人々の生活も落ち着いてきたのか。しかしよく見ると、人の気配の消えた家、シャッターの錆びついた商店が目立つ。気仙沼漁港には観光客もいて賑やかだったが、そこ以外はまだ活気溢れる町とはほど遠かった。南三陸に入ると、海沿いに開ける平地はこれから団地の建築を待つ造成地のようだった。そこに何かがあったのか、最初から何もなかったのか、一見しただけではよ

## 自然と仲良く暮らすために

—— 知ること、考えること、伝えること

くわからなかった。

翌朝、震災を経験した人が語り部となって町を案内してくれるバスに乗った。車窓から見えたのは、テレビで何度も見た、津波によってさらわれた町の残骸だった。造成地のように見えた場所には、砕けた家の基礎が残り、何ごともなかったように見えた立派な建物も、破れた窓の中を風が吹きぬけていた。所々に瓦礫の山が築かれ、へしゃげた船、錆びた車の墓場もある。そこにあったはずの家も店も人々の暮らしも何もなく、ただ草だけが逞しく生きていた。ほんの少し坂を登っただけの高台には、洗濯物の干された家が点在し、生死を分けた僅かな差を実感した。この家とて無事だったわけではないだろう。瓦が落ち、窓も割れ、家財も散乱しただろう。けれど何とかこうして日常を取り戻している。大きな地震ではあったが、それだけなら復興も早かったはずだ。あの津波さえなければ。

町の商店主たちが協力して立ち上げた商店街もできている。利用者の八割は旅行者だと聞き、たった一泊の旅で、ボランティアもできずに帰る後ろめたさが少し和らいだ。海辺に建ち、屋上まで津波に曝されながら一人の犠牲も出さなかった戸倉小学校は、校舎も震災直前にできた体育館も跡形もなかった。生徒一人と先生が亡くなった戸倉中学校は高台にあった。こんなところまで津波が来たというのか。最後まで住民に避難を呼びかけ亡く

なった職員の方がいた防災センターにも立ち寄った。錆びた鉄骨だけになったセンターには、屋上にあるアンテナの途中まで波が来て、たくさんの命を奪った。外階段はぐにやりと曲がり、津波の威力を見せつけていた。

「この町の姿をカメラに収めて、たくさんの人に見てもらってください。観光に行くのは気が引ける、などと思わないでください。」

語り部さんの言葉は、これからもこの町で生きていく決意が感じられた。この先どこに住めばよいのか、仕事はあるのか、仮設住宅で不安に駆られながら小さい子どもたちを育てている若い人たちのストレスを、自身も仮設に住み、幼い子ども二人を持つ親である語り部さんが話してくれた。いつまでもひとから頂いた物資で子育てをしたくない。けれど、自分では買ってやる余裕もない。じゃあ、どうしてほしいのか、どうすべきなのかもわからないというのだ。子どもたちの遊び場は狭い仮設の中とその周辺だけだ。中高生が、休日に遊びに行く店も、夕暮れまで語り合う公園もない。こんな生活が続くと、町に対する愛着は薄れ、みんな出て行ってしまふかもしれない。元の生活に戻るためには、物理的な問題だけがクリアされてもだめだ。元の場所、元の仲間と、元の仕事があってこそ叶うことなのだ。

福島はこの問題を解決できるのだろうか。壊れた建物を撤去し更地にすることも、行方



## 自然と仲良く暮らすために

—— 知ること、考えること、伝えること

不明の人を探しに行くこともできない。ボランティアも観光客もなく、そこで今何が起きているのかを知る手だてもない。そしてこの状況がいつまで続くのかさえわからないのだ。地震だけなら、いや津波だけならまだ良かった。放射能さえなければ、ゆっくりとでも立ち直れたのに。元の場所での生活を希望する人が減少したという。戻りたいと言えば戻れるのか。命の保証もない土地で子育てをしたいという人がどれだけいるというのか。国は、避難区域の人がみんな諦めるまで、じっと待っているだけなのだろうか。

これだけの経験をしてもお、私たちは原子力発電に依存しなければいけないのだろうか。原発先進国のフランスでさえ、いち早くエネルギー政策の見直しを始めたという。私は原発には反対だ。けれど声高に反対を唱えられるほど、国のエネルギー事情を理解しているわけではない。本当に必要な電力はどれくらいなのか、足りない分は我慢では補えないのか。安全な再生可能エネルギーを開発することに、なぜもっと積極的になれないのか。知らないことばかりだ。フランスの原発からすぐ近くにあるドイツの小さな町で、住民がお金を出し合って再生可能エネルギーの活用に取り組んでいるという話を聞いた。自分たちの手で自分たちの生活を守るという考えは、今の日本に欠けているのかもしれない。豊かな暮らしは国に頼るだけでなく、現状を批判するだけでなく、自分たちで考えることか

ら始まるのだと思う。

私の住む町は、かつて公害の町と呼ばれていた。多くの犠牲を払い、今私たちは普通の生活ができているが、今でも工業都市としてコンビナートに依存している部分が大きい。いずれ来るであろう南海トラフ地震の際には、この地域にも五メートル程度の津波が押し寄せ、コンビナートのある埋立地は液状化すると予測される。私の家も水と火に包まれるかもしれない。私は安全に暮らす方法、自然とうまく折り合いをつける方法を知りたい。地熱発電や風力発電についてもっと知りたい。知ることがたくさんの人の命を救うことに繋がるのだと思う。大学では地球工学、環境工学を学びたい。立ち向かうには大きすぎる自然とも、もっと仲良くする方法があるはずだ。災害から命を守ること、自然の恵みを利用して暮らしを豊かにすること、私に何ができるのかはわからない。けれど、正しい知識を身に付けて、それをできるだけたくさんの人に伝えたいと思う。『津波てんでんこ』の教訓のように、不幸な出来事から学ぶことはたくさんある。経験や知識を前に向けての力に換え、もっと先の人たちに伝えていくことが私たちの使命だと思う。震災を機に見つけたこの目標を、私は必ず達成したい。